

京都大学所蔵漢代鉄剣について

坂 川 幸 祐*・村 上 由美子*²

Research on Two Iron Long Swords made in the Han Dynasty housed
in the Kyoto University Museum

SAKAGAWA Kousuke, MURAKAMI Yumiko

【要旨】

京都大学総合博物館に所蔵されている2点の鉄製長剣〔2984〕と〔3636〕は、京都大学文学部博物館が発行した目録にも記載がなく、長い間公表されていなかった。京都大学総合博物館では本資料の最終的な公表に向け、保存処理と考古学的研究を進めている。本資料はその伝来過程が不明であったが、詳細観察とAMS年代測定により確かに漢代に遡ることがわかった。またこれらの長剣に伴う有機質鞘の遺存状態がよく、国内でその詳細を観察可能な貴重な資料であることが判明した。これらの鉄製長剣は璣を伴わず、漢代社会で広い範囲で用いられたごく一般的な製品であり、これまでに中国の発掘で報告された有機質鞘とその製法が共通する。そしてその同様の製法は前後する時代の刀剣類にも採用され、長期間継続していた。これと通底する技法は日本の古墳時代の刀剣にも一部みられ、ユーラシアの刀剣鞘の製作技法との関係を解明するための基礎的な情報を、本資料は提供しうる。

キーワード：中国考古学、鉄製長剣、有機質遺物、AMS年代測定法

はじめに

京都大学総合博物館には、戦前を中心に収集された多数の中国製文物が収蔵されていることは、既刊の目録〔京都大学文学部編1963〕によって知られる。これらの文物は質・量ともに日本国内では有数のコレクションとなっており、国内で詳細な調査が可能な資料として指折りの価値を誇る。特に近年は調査や展示等の活用の実績が増えてきており、以前にもましてその重要性は高まっている。

しかし一方で、目録には収録されず、そのために存在自体が知られてこなかった収蔵品もまた存在する。それは遺存状態が悪く公開に堪えられない、来歴に関する記録が断片的であるなどの事情によるが、そのなかには本稿で紹介する鉄製長剣のような学術上重要な意義をもつ資料もあり、そういった未公開の収蔵品の公開とそれに向けた取り組みが必要である。

現在京都大学総合博物館ではこういった未公開資料の活用の試みの一環として、未公開

* 島根大学法文学部社会文化学科

*² 京都大学総合博物館

の漢代鉄製長剣の保存処理と関連した調査をおこなっている。当該資料と保存処理および研究の試みについてはこれまでも紹介したことがあるが〔坂川・村上 2024a, 2024b〕、それらはあまりにも簡潔で十分なものではなかった。本稿ではこれらの鉄製長剣について、これまでの説明を補足しつつ、現在までの調査で判明したことを紹介し、今後の活用に向けて当該資料の意義を述べたい。

1. 京大所蔵漢代鉄製長剣について

(1) 鉄製長剣の来歴と現状

本稿で紹介する2点の鉄製長剣には、それぞれ〔2984〕〔3636〕の収蔵番号が付されている。2点はともに1920年代に濱田耕作が寄贈したことが総合博物館の収蔵品カードに記録されているが、中国より将来されたことが書き残されるのみで、その具体的な出土地や入手地点等は伝わっていない。当時濱田は関東庁博物館（のちの旅順博物館）の館長を務めており、中国系文物の収集を通じて殷墟の発掘に関心を寄せていたことが知られている。そのような大陸文物の収集活動のなかで濱田はこの2点の長剣を入手したと考えられる。

来歴には不明瞭な部分があるものの、この2点の鉄製長剣は残存状態がよく、豊富な情

報を提供してくれる（図1）。実測や両面の熟覧等基礎的な研究に耐える状態ではなかったため、現在確認できている情報は限られるが、その一端をここに紹介する。両者は刃部から茎まで一体で作られており、青銅製の鐔を刃部と茎の境目に嵌める。〔2984〕は残存長約90cmを測り、刃部で折れているものの接合すれば切先まで完形に復元できる。以下に述べる〔3636〕よりも残りは悪いものの、鞘や柄を構成する有機質が部分的に残存し、特に刃部の鐔付近は漆被膜が脱落することを除いて鞘の両面が残存している。〔3636〕は残存長約92cmを測り、茎が折損するものの刃部は末端まで残存する。本資料で目を引くのは鞘の残存状況であり、刃部を鏝着により巻き込みつつ細片化しているものの、表面の漆被膜が波打つように変形しながらも鞘口から末端まで完全な形で残存している。ただし内部の金属成分は劣化が著しく、X線などによる金属部もとの形状把握には適さない。

2点の鉄製長剣は、寄贈後に収蔵された陳列館から1980年代なかばに文学部博物館新館（現在の総合博物館東館）に移され、それ以来現在の収蔵場所にあったと考えられる。坂川が最初に確認した2021年時点では、2点は細長い木板を台座として隣り合うようにして置かれていた。2点を動かすにはその細長い板ごと持ち上げる必要があったが、2点はともに折損し、特に〔3636〕は鞘と鉄製長剣本体がともに細片化していたため、出納には最大限の注意が必要になっていた。また収蔵ケースの引出し口は木板の長さよりも小さくなっており、収蔵ケースの中で向きを変える必要があった。このような収蔵環境に由来する問題と、主に〔3636〕の有機質の脆弱さから、2点の鉄製長剣は目録作成段階で出納が困難になっており、そのために目録に掲載



図1 総合博物館蔵鉄製長剣接合検討の様子
（奥：〔2984〕、手前：〔3636〕）

できなかったのだろう。

本稿執筆現在、これら鉄製長剣が展示や調査等の活用に堪えるように、元興寺文化財研究所に依頼して保存処理をおこなっている。それに伴い、同研究所で鞘の細片の接合検討や鐔の蛍光 X 線分析などの調査がおこなわれた。特に接合検討では、鞘の細片が [2984] と [3636] の間で一部混交していたこと、それを整理した上で [3636] の鞘はほぼ完全な形に接合できることなどが明らかになった。保存処理は 2024 年度中に完了することになっており、その後実測等の基本的な調査をおこなう予定である。

(2) 鉄製長剣の調査

前節では鉄製長剣の詳細と現状について紹介した。漢代の鉄製長剣そのものは珍しいものではないが、その有機質装具が良好な形で残存する例は貴重である。本節では本資料の

保存処理に伴っておこなった調査の成果について、部分的にはあるが紹介したい。

・鞘の詳細観察

本資料の特徴として、差はあれどもともに有機質鞘の残存状況が良好であることは述べた。保存処理のための出納と接合検討に先立ち、これら有機質鞘の細片の詳細観察をおこなった。

[2984] については、鞘口付近の鞘断片が注目される（図 2-1, 2）。先述した通り当該部位の漆被膜は脱落しており、また部分的にしか残存しないため鞘全体の形態を把握することはできない。しかし木材を始めとした有機質が表面まで残存していたため、漆被膜下の構造を観察することができる。特に重要なのは、木材の外面に布を巻いていたことである。織り密度の計算は保存処理を待ってからおこなうことになるが、目が細かく、単純な



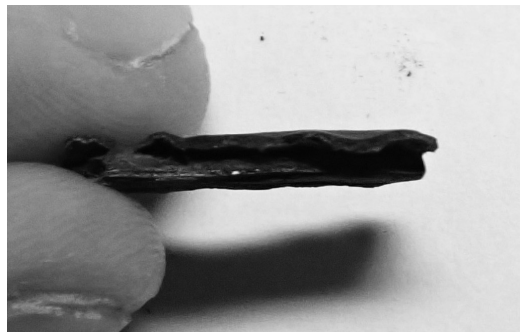
1



2



3



4

図2 鉄製長剣細部

平織で作られている。加えて断片的ではあるが、図 2-1 左側に、鞘の木材の長軸方向に走る木目に対し直交する方向に走る別の繊維が確認できる。漢代の別の事例を参照すると、これは先述の布の上から巻き付けた、細い糸であると考えられる。すなわち、[2984] の鞘は① 2 枚の木板を合わせる→②上から目の細かい布を巻く→③さらにその上から細い糸を巻く→④漆を塗布する、という工程により作成されたことがわかる。

[3636] は先述のように漆被膜の残りがよく、その上で被膜下の有機質が鉄剣の銹と一体化し被膜下の組織を観察するのが困難であった。しかし漆被膜そのものの残りはよく、漆まで含めた鞘の外形を把握するには適した資料である。まず目を引くのは、図 2-3 のように鞘口付近の部位には両面ともに中軸に凸線が走ることである。この凸線は漢代の発掘資料にも伴うことがあり、また以下に述べる土山屯例などの資料では明確な稜を呈し鞘の断面が菱形になる。一方でこの凸線は鞘の中段以下では確認できず、ここでは断面は楕円形になる。この特徴もまた、漢代の発掘資料に一般的である。鞘尻は磨滅していたが、扁平なまま薄く収束しており、保存処理前の事前観察では面取り等の処理の痕跡を見出せなかった。以上が残存した漆被膜からみた鞘外觀の特徴である。一方鞘の構造については、断面を図 2-4 のように観察すると、漆は厚 1mm ほどの層をなしており、また波立つように変形した外表の漆被膜の下にもさらに 1 層漆膜があるように見える。[3636] は漆を厚く、またおそらく複数回に分けて塗布したことが確認できる。なお成分分析は行われていないものの、漆被膜は全体を通じてやや赤みのある黒色を呈しており、異なる色彩の紋様や漆被膜の部分的な剥落等は、保存処理前

の観察では確認できなかった。

・鞘断片の炭素 14 年代測定

鞘断片の観察に加え、株式会社パレオ・ラボに依頼し、接合が難しい鞘の小片を数点採取し、AMS 法による炭素年代測定をおこなった。その結果を表 1 にまとめている。試料 No.1~3 は元興寺文化財研究所への送付前、No. 1 β ~4 β は同研究所への送付後、接合検討ののちに接合不可能であった断片を改めて採集したものである。このうち後者については、木板から鉄剣を移動させたのちに残った小片群にあたる。これらの試料の帰属する鉄剣はそれぞれの鉄剣鞘の現状と採取位置に照らして判断したが、上述のように 2 点の鉄剣鞘の小片は混交している可能性があるため、それぞれの試料が帰属する鉄剣が誤っている可能性を完全に排除することができない。今後異なる試料で測定をおこなう際、これと矛盾する結果が得られる可能性もあることを断っておきたい。

測定値は、試料 No. 1, 2, 1 β が期待された年代を大きく遡る測定値を示す。試料 No. 3, 2 β , 3 β はそれぞれ中心値を戦国時代並行期におく。今回測定した試料では、No. 4 β のみが前漢期に完全に収まる年代値を示した。このように、期待された年代から大きく外れる測定値を含め、全体として測定結果が古くなる傾向がある。測定を担当された方の話では、試料 No. 3, 4 β をのぞき、いずれの試料も鉄分が鞘に浸透して炭素の含有量が低く、十分な炭素が得られなかったことが指摘された。これを踏まえると製作年代をある程度反映しているのは、試料 No. 3, 4 β のみといわざるをえない。前者は 2 σ 暦年代範囲に戦国後期～前漢前期の年代を 38% の確率でカバーする。後者は前漢期のうち幅広い年代を覆うが、前漢後期より古い年代に収まる。したがって、

表 1 総合博物館所蔵鉄製長剣年代測定結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年代に校正した 年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-50718 試料 No.1 資料番号：2984	-16.43 ± 0.18	2643 ± 20	2645 ± 20	812–797 cal BC (68.27%)	828–791 cal BC (95.45%)
PLD-50719 試料 No.2 資料番号：3636	-24.14 ± 0.19	2351 ± 20	2350 ± 20	408–394 cal BC (68.27%)	475–435 cal BC (9.03%) 422–386 cal BC (86.42%)
PLD-50720 試料 No.3 資料番号：3636	-17.16 ± 0.19	2179 ± 20	2180 ± 20	350–305 cal BC (41.53%) 208–174 cal BC (26.74%)	356–278 cal BC (54.77%) 258–246 cal BC (2.05%) 232–166 cal BC (38.63%)
PLD-52559 試料 No.1 β 資料番号：3636	-18.09 ± 0.25	2319 ± 20	2320 ± 20	400–389 cal BC (68.27%)	408–372 cal BC (95.45%)
PLD-52560 試料 No.2 β 資料番号：2984	-21.94 ± 0.23	2257 ± 18	2255 ± 20	386–357 cal BC (35.93%) 278–259 cal BC (19.29%) 245–233 cal BC (13.05%)	391–351 cal BC (41.23%) 291–208 cal BC (54.22%)
PLD-52561 試料 No.3 β 資料番号：3636	-15.40 ± 0.24	2192 ± 18	2190 ± 20	353–338 cal BC (13.08%) 328–285 cal BC (35.32%) 229–216 cal BC (9.21%) 211–198 cal BC (10.66%)	358–276 cal BC (58.06%) 260–244 cal BC (4.71%) 233–174 cal BC (32.68%)
PLD-52562 試料 No.4 β 資料番号：2984	-25.36 ± 0.20	2104 ± 18	2105 ± 20	154– 96 cal BC (53.60%) 72– 56 cal BC (14.67%)	171–51 cal BC (95.45%)

試料の採取状況に関する留保はあるものの、今回扱った2点の鉄剣が、事前の観察通り前漢期の資料であるとしても大きくは矛盾しない結果が、今回の測定からは得られたと考えたい。

2. 京都大学総合博物館 鉄製長剣の位置づけ

以上、今回紹介した2点の鉄製長剣が、来歴不明ながらも前漢期の中国で製作された製品であると考えられることを述べた。特に有機質鞘の残りのよい本資料は、東アジアの漆木製品の製作技術に関する研究に資する重要

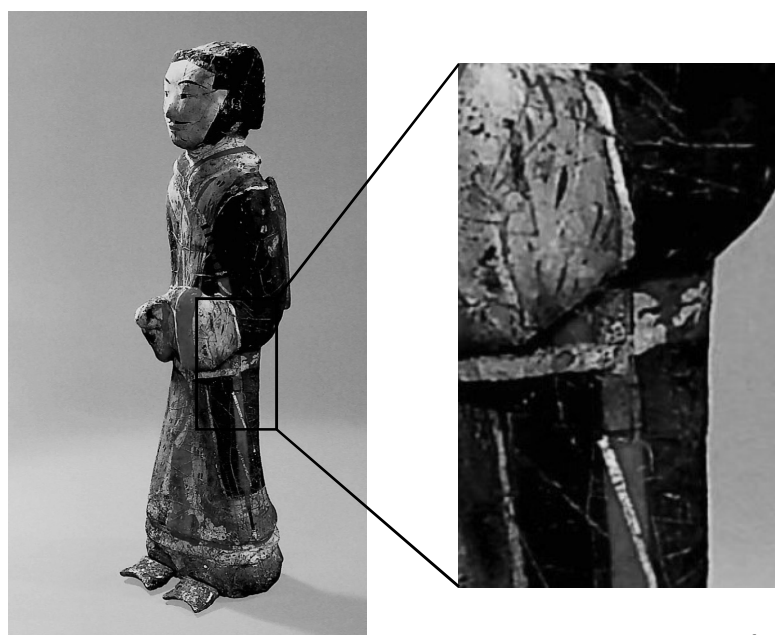
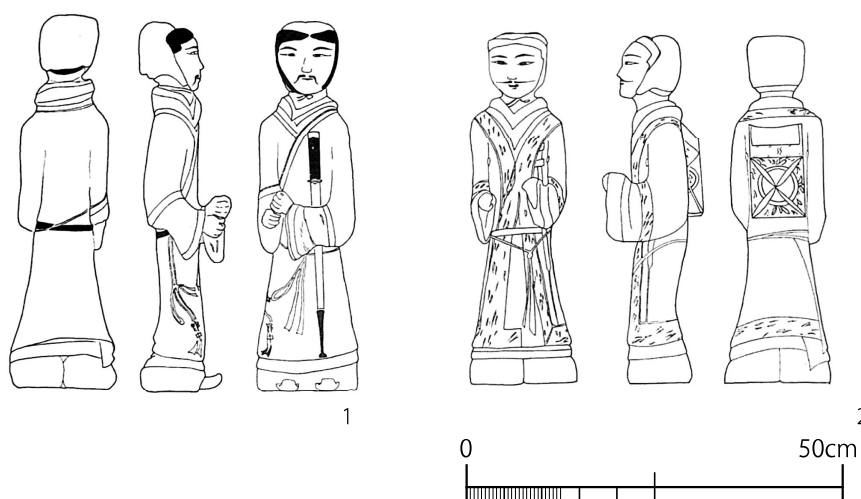


図3 徐州北洞山遺跡出土長剣を佩用する俑

な資料になることが期待される。

それではこれら鉄製長剣は漢代社会においてどのような社会的位置を占めていたのだろうか。ここでは中国の鉄製長剣および関連資料を確認しながら、その位置づけについて考察したい。

(1) 漢代における鉄製長剣の佩用方法

漢代中国における鉄製長剣の佩用方法とそ

の鞘の形態は密接な関係がある。そのためまずは鉄製長剣の佩用方法を確認したい。

漢代鉄製長剣の佩用形態を如実に物語る資料は、江蘇省徐州市北洞山遺跡から得られている。前漢前半の楚王墓と考えられているこの墓からは、200体近くの俑が出土しており、その多くが彩色により鉄製長剣を佩用する武官を表現している。帯から垂下される綬には

「郎中」「中郎」などと記入され、楚王に仕えた郎官を表現したと考えられている（図3-1-3）〔徐州博物館・南京大学歴史学系考古専業編著 2003〕。

これらの俑は、腰に幅広の帯を巻いた上で、その上から鉄製長剣を立てて左前にあてがい、その上からさらに細い帯を巻いて鉄製長剣を腰に固定している。柄頭は腋付近に位置しており、即座に鞘から剣を抜くことは難しいため、実戦以上に身分表示のような機能を伴っていたと考えられる。このとき、鞘に取り付けられた長方形の装具の下を上述の細い帯は通過している（図3-3）。この装具は中国考古学では「瓏」と呼ばれ、漢代には主に玉で製作されたものである。この「瓏」を使用した具体的な佩用方法についてはかつて認識が固まっていなかったが、近年ではここでもみるように腰帯の外に長剣鞘をあてがい瓏をその外に向けて細い帯を通すという認識に落ち着いている〔Trousdale 1975、孫 1985〕。この瓏と細い帯を用いた佩用が、漢代中国において一般的におこなわれた長剣の携行方法であった。

しかしこの瓏が必ず長剣に伴うものであったものであったわけでもない。鞘への固定方法については、紐で鞘に括り付けるという方法が、主に『漢書』『王莽伝』の記述の解釈から提示されてきた〔林 1973〕。しかし実際の出土資料には、そのような紐を巻いた痕跡をみられる事例はない。山東省青島市土山屯 147 号墓出土例（図4-1）は、鞘の中段付近に赤漆を塗り、その上から茶色の彩色で格子紋を施す。そうして形成した紋様帯の上から、玉製の瓏を漆で鞘に膠着させていたことが報告されている〔青島市文物保護考古研究所・黄島区博物館 2019〕。またさらに近年前漢並行期の夫余の墓地とされている吉林省榆樹県

老河深 56 号墓出土の漢製鉄製長剣の改変事例（図4-2）では、鞘に四角い漆被膜の脱落があり〔吉林省文物考古研究所編著 1987〕、膠着させていた瓏をはがした痕跡であると考えられる。以上から一般に瓏は漆で鞘に直接固定するものであり、それを取り外した場合四角い痕跡が観察できるはずである。

保存処理前の簡単な観察ではあるが、[3636]の漆被膜にはそのような膠着物をはがした痕跡や、土山屯例にみられるような紋様帯は看取できなかった。接合検討を担当された方にうかがっても、そのような痕跡はみられなかったとのことである。すなわち[3636]は、瓏が脱落したのではなく、もともと瓏を伴わない鉄製長剣であった。

瓏を伴わない鉄製長剣の出土事例は、前漢前期に遡る四川省榮經県高山廟 5 号墓で確認されている〔四川省文物考古研究院・雅安市博物館・榮經県博物館編著 2017〕（図4-3）。全長 96.7cm を測るこの鉄製長剣は、報告段階では鞘の木質が失われ細片化した漆被膜を残すのみとなっていたが、出土時には黒漆を塗布した木製の鞘を伴っていたという。当遺跡は地方の集団墓地と認識されたが、そのなかでも最大の規模を誇り、南北長 4.26m、東西幅 2.48m の木槨を、長方形の墓壇の底面いっばいに構築する。副葬品も同墓地内で最多の副葬品内容を誇り、特に秦半両から四銖半両まであわせて 701 点の半両銭が副葬されていたことは注目される。この墓の規模は、地域は異なるが墓底長 4.4m、墓底幅 2.6m の湖北省荊州市鳳凰山 8 号墓に近い〔湖北省文物考古研究所編 2012〕。8 号墓からは被葬者の地位を示す文字資料は得られなかったものの、同墓地内にあるやや規模の大きい 168 号墓と規模の小さい 10 号墓から、それぞれ被葬者が爵五大夫に相当する人物であったことを示す木牘が

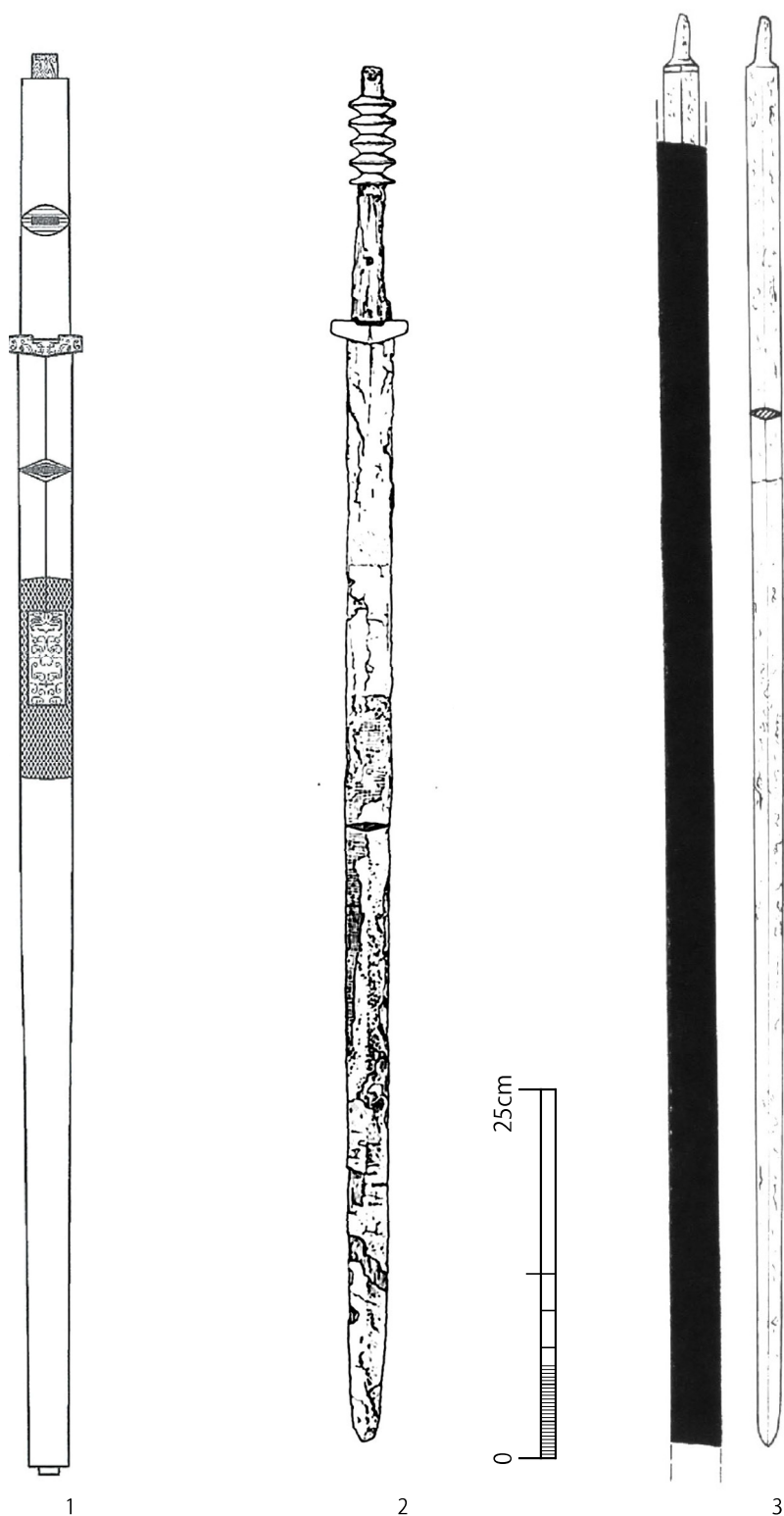


図4 中国出土鉄剣の諸例

出土しており、低位の官人ないしそれに近い集団により営まれた墓地であったことがわかっていて。特に 10 号墓の被葬者に関して、佐原康夫はその出土文字資料の分析から被葬者である張偃が里正として、里内と連携して調節のうえ官の要求を満たす調整役を果たしていたことを指摘する[佐原 2002]。高山廟 5 号墓の被葬者も、その地位を示す文字資料は得られていないものの、官と民との間に処する地方の有力者と位置付けられよう。また大きく時期が下る事例ではあるが、前漢末の山東省連雲港市尹湾 6 号墓からも璽を伴わない鉄剣が出土している[連雲港市博物館ほか編著 1997]。本例の図面は公開されていないが、漆被膜が完全に残る事例であり、報告によれば全長 105.5cm を測り、中段に波浪紋を施すという。出土文字資料から被葬者は東海郡の功曹であった史師饒という人物であることが指摘されている。功曹は郡太守の属吏では最高位であり、勅官である郡太守から選任される郡行政の実力者であった[嚴 1961]。璽を伴わない鉄製長剣は、前漢末においても地方社会の有力者の間で一般的に用いられていたのである。なお本例や上述した土山屯 147 号墓例にみられるような鞘中段の紋様帯について、原田淑人は楽浪漢墓出土例をもとに皇帝から諸王侯を含めた百官の等級を反映していると推定した[原田 1937]。これに従えば、本稿で紹介した[3636]は尹湾例よりは等級が落ちることになる。

以上から、[2984]の評価は難しいにしても、[3636]は前漢期を通じて主に地方の富裕層ないし地方行政上の有力者の間で広く用いられていた鉄製長剣と位置付けることができる。土山屯例などと比べると等級は落ち、ごく一般的に用いられた長剣であった。しかし、そのような長剣の遺存状況は概してよく

なく、[3636]のように鞘がほぼ完全な形で残っていることは珍しい。現代に伝わりにくいごく一般的な漢代物質文化の一側面を如実に伝えてくれる点で、[3636]は大きな意義を有する。

(2) 長剣鞘の製作技法

上述したような中国の出土例と対比できる豊富な情報が得られたことに加え、特に[2984]から漆塗り長剣鞘の製作技法に関する情報が得られたことは重要である。

中国における漆塗の剣鞘は楚地域を中心に先秦期から報告されているが、[2984]にみられたような鞘の構造に関しては、秦始皇陵の 1 号兵馬俑坑で報告されているものが古い事例であろう。本遺構からは兵馬俑に伴い実物の武器が多数出土しており、17 点の銅製長剣が報告されている[陝西省考古研究所・始皇陵秦俑坑考古発掘隊編著 1988]。報告によればそのうち 5 点に漆塗り鞘の痕跡がみられ、特に 0624 と番号づけられた事例は、木製の素地を麻布で包み、糸を巻いてまとめ、褐色の漆を塗って仕上げていたという。この記述からは、[2984]にみられたものと同様の工程で戦国末から秦代の長剣鞘が製作されていたことがうかがわれる。ただし本例は図面が詳細を欠き、製作痕跡の具体的な様相をうかがうことはできない。一方長剣ではないが、鉞と呼ばれる槍状の武器にも刃部に漆塗りの鞘を伴った事例が報告されおり、そちらは詳細な図面が掲載されている。0450 と番号が付された事例には刃部の形に合わせた鞘が伴っており、2 枚の木板を合わせて素地を作り、それを幅のある革紐をジグザグにまとわせてまとめ、その上から漆を塗布している(図 5)。図面には麻布の痕跡も記されているが、本例では漆や革紐との関係は明らかではない。状態は劣るものの、0882 の番号が付された事例に

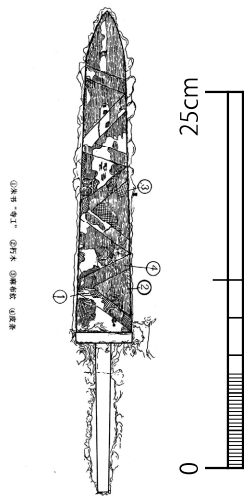


図5 秦始皇陵兵馬俑1号坑出土鉄

も、革紐をジグザグに巻いた鞘が確認できたという。長剣には漢代の事例に通じる製作痕跡がみられた一方、異なる武器には異なる製作過程が見出せる点は興味深い。

木製素地の上に布を巻いてから漆を塗る技法は、漢代のそのほかの漆器にも指摘されている。大谷・岡田はモンゴルの匈奴時代の遺跡から出土した漢製の耳杯の断片の顕微鏡観察から、複数の個体について素地と漆の下地層の間に布の層が存在することを報告している〔泉屋博古館 2022、大谷・岡田・エレグゼン 2024〕。ここでは、この布の層は「布着せ」と評価されている〔泉屋博古館 2022〕。布着せは現在の輪島塗にもみられる技法で、木製素地の強度を増す役割があるのだという〔田谷漆器店 2020〕。一方で布の上から糸を巻き付ける作業は、耳杯にはない長剣鞘独自の工程といえよう。

このような長剣鞘の製作に関する痕跡は、漢代の長剣の報告でもしばしば言及されてきた。たとえば河南省洛陽焼溝漢墓の発掘では鉄剣や大刀が複数報告されているが、そのうち数点に木製鞘の残存が確認されており、い

ずれも木板を二枚合わせた上から糸ないし布を巻き、その上から漆を塗布することで仕上げていたという〔洛陽区考古発掘隊 1959〕。前漢中期の中山靖王劉勝の墓である河北省満城漢墓1号墓では3点の鉄製長剣が報告されているが、そのうち2点に鞘の痕跡が残存しており、2枚の木板をあわせて糸を巻いたのち褐色の漆を塗って仕上げたことが、疑問符をつけながらも言及されている〔中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理处編著 1980〕。また前漢期後半の江蘇省盱眙県東陽墓地でも漆塗りの鞘を伴う長剣と大刀が報告され、そのいずれもが2枚の木板の上から糸を巻き黒漆で仕上げていることが述べられている〔南京博物院・盱眙県博物館 2013〕。このように長剣あるいは大刀の製作技法に関する報告は断片的になされてきたが、その多くは簡単な言及にとどまり、細部写真や実測図による詳細な報告を欠いているのが現状である。例外として洛陽焼溝漢墓の報告の中で小さく大刀の鞘の細部写真が報告されているが、1点のみの報告であり、また写真も古いため細部の観察をおこなうには不向きである。

漢代以降に下る中国の類例として、長剣ではないものの、三燕文化に属する遼寧省朝陽市十二台1号墓出土の鉄製大刀が挙げられる〔豊島 2010〕。本例は鞘尻の観察から、長剣鞘同様2枚の木板を合わせ、植物繊維を巻き、さらにその上から細い布帯を巻いたのちに漆を塗布していることが指摘されている。布帯の巻き方の詳細が不明ではあるが、これもまた上述の鞘の製作方法に通じる事例と考えてよい。ここで言及されている植物繊維も、〔2984〕にみるような布である可能性が高い。

これらの事例から、布ないしその可能性の高い植物繊維で木板を包み、加えて糸などを

巻き付けて固定する製作技法が、少なくとも戦国末から三国時代以降までの長剣や大刀の鞘に一貫して存続していたことがわかる。南北朝時代以降になると中国の大刀の鞘の実例が希薄になるため実際の様相は不明であるが、漢代以来の刀剣装具の連続性がうかがわれる資料がある。劉宋以降のおそらく南齊末期とされる江蘇省丹陽市建山金家村大墓の磚画には璣による佩用特有の帯の表現を伴う環頭大刀を携行した騎馬人物像が組み込まれており（町田 1987 の図 103-4 を参照）、また同墓の別部位の磚画には漢代以来の装具の形態をとどめる長剣を、北洞山例などと同様柄頭を腋付近まで上げる形で佩用している「持戟武士」像もみられる（町田 1987 の図 103-5 を参照）〔南京博物院 1980〕。これらの図像をみる限り、漢代以来の長剣や大刀の装具の製作も 6 世紀まで存続していた可能性は否定できず、秦代から西晋以降まで連続していた鞘の製作技法が南朝で断絶していたとはいまのところ考え難い。なお日本列島でも島根県出雲市上塩冶築山古墳の金銀装振環頭大刀にみられた、麻布を巻きその上から帯状の有機質を巻いた上で漆を塗布する鞘〔坂本ほか 2024〕や、複数層の布および紐状有機質を巻いた上に部分的な漆の痕跡が認められた三重県伊賀市東条 1 号墳出土振環頭大刀の鞘〔高松 2015〕など、製作技法の特徴が上記の中国製長剣鞘と通底する事例が散見する。漆塗りの鞘を製作する際の合理性から製作方法が収斂した可能性も当然あるが、長剣や大刀の鞘の製作技法を東アジア全体で長期的な視座で検討する価値が、ここに示されよう。

おわりに

以上、京都大学総合博物館所蔵の未公開資

料について、その概要と意義について述べた。これら 2 点の鉄製長剣は前漢期の社会においてはとりたてて等級の高い製品ではなかったと考えられるが、だからこそ漢代の一般流通品を通じた文化を考察する上で貴重な資料であり、またその細部の検討からは周辺諸族や後継王朝を介して日本を含む東アジアにまで及ぶ拵えの製作技法の影響関係を論ずる上で重要な情報が得られるのである。

加えて長剣鞘の技術論的検討は、東アジアにとどまらずユーラシア全域を視野に入れた交流を論ずる上で極めて重要な視点となりうる。紀元前 1 千年紀末、中国に起源する長剣が、果てはハンガリー平原に至る広大な領域に拡散することは、トゥルースデイルの浩瀚な研究をはじめとする先学によって指摘されている〔Trousedale 1975〕。トゥルースデイルは璣をはじめとした鞘装具の分析を、資料数の関係から主に彫刻資料を用いておこなったが、その研究以降ユーラシアの各地で璣および長剣の実物資料が増加しており、有機質装具の分析の可能性が高まりつつある。これがもし可能となれば、装具の外観のみにとどまらず、ユーラシア規模の技術的影響関係についても論じることができるようになる。そのためには、伝播元となった中国の鞘製作技法を押さえておくことが極めて重要である。

そのような資料が京都大学総合博物館にて容易にアクセスできるようになることで、ユーラシア全体を視野に入れた武器製作に関する議論の進展が期待される。今後当資料の保存処理を進め、展示や研究等の活用を通じて日本やユーラシアの考古学の進展に寄与してゆくことを目指している。

付 記

本研究は株式会社パレオ・ラボ「若手研究者を支援する研究助成」日本学術振興会科学研究費助成事業若手研究（課題番号 24K161921）による成果の一部である。

引用文献

【日文】

- 大谷育恵・岡田文男・G. エレグゼン 2024「ドーリク・ナルス 1 号墳より出土した毛彫文耳杯について」『金大考古』83、金沢大学考古学研究室、金沢、pp. 120-129
- 京都大学文学部編 1963『京都大学文学部博物館考古資料目録』3、京都大学文学部、京都、p. 270
- 坂本豊治・奥山誠義・北井利幸・河崎衣美・中尾真梨子・小倉頌子 2024「出雲市上塩冶築山古墳出土「赤鞘の大刀」の構造」『地域と交流の考古学 日本考古学協会 2024 年度島根大会研究発表資料集』日本考古学協会 2024 年度島根大会実行委員会、松江、pp. 281
- 坂川幸祐・村上由美子 2024a「総合博物館コレクション研究〈21〉濱田耕作将来漢代鉄製長剣の紹介とその保存・活用について」『京都大学総合博物館ニュースレター』No. 61、京都大学総合博物館、京都、pp. 8-9
- 坂川幸祐・村上由美子 2024b「京都大学所蔵漢代鉄製長剣の炭素 14 年代測定」『地域と交流の考古学 日本考古学協会 2024 年度島根大会研究発表資料集』日本考古学協会 2024 年度島根大会実行委員会、松江、pp. 285
- 佐原康夫 2002「江陵鳳凰山漢簡再考」『東洋史研究』第 61 巻第 3 号、東洋史研究会、京都、pp. 405-432
- 泉屋博古館 2022『よみがえる漆器－モンゴル出土漢代漆器の保存修復』、泉屋博古館、京都、p. 7
- 高松雅文 2015「Ⅳ調査の成果～出土遺物～
1 東条 1 号墳埋葬施設 1 出土遺物 a 鉄刀」『東条 1 号墳・屋敷の下遺跡』三重県埋蔵文化財センター、津、pp. 25-33
- 田谷漆器店 2020「漆器ができるまで」(<https://www.wajimanuri.co.jp/process/>)、2025/1/7 最終閲覧
- 林已奈夫 1973『中国殷周時代の武器』京都大学人文科学研究所、京都、p. 644
- 原田淑人 1937『漢六朝の服飾』東洋文庫、東京、p. 154
- 豊島直博 2010「Ⅴ. 三燕の鉄製武器」『北方騎馬民族のかがやき－三燕文化の考古新発見－』奈良文化財研究所飛鳥資料館、明日香、pp. 46-54

【中文】

- 湖北省文物考古研究所編 2012『江陵鳳凰山西漢簡牘』中華書局、北京、p. 225
- 吉林省文物考古研究所編著 1987『榆樹老河深』文物出版社、北京、p. 171
- 連雲港市博物館・東海県博物館・中国社会科学院簡帛研究中心・中国文物研究所編著 1997『尹湾漢墓簡牘』中華書局、北京、p. 189
- 洛陽区考古発掘隊 1959『洛陽燒溝漢墓』科学出版社、北京、p. 243
- 南京博物院 1980「江蘇丹陽景胡橋、建山兩座南朝墓葬」『文物』1980 年第 2 期、文物出版社、北京、pp. 1-17
- 南京博物院・盱眙県博物館 2013「江蘇省盱眙県東陽漢墓群 M30 発掘簡報」『東南文化』2013 年第 6 期、江蘇古籍出版社、南京、

pp. 35-43
青島市文物保護考古研究所・黄島区博物館
2019「山東青島土山屯墓群四号封土与墓葬
の発掘」『考古学報』2019年3期、中国雜
誌社、北京、pp. 4505-438
陝西省考古研究所・始皇陵秦俑坑考古発掘隊
編著 1988『秦始皇陵兵馬俑坑 一号坑発掘
報告』文物出版社、北京、p. 280
四川省文物考古研究院・雅安市博物館・滎經
県博物館編著 2017『滎經県高山廟西漢墓』
文物出版社、北京、p. 249
孫機 1985「玉具剣与璣式佩用法」『考古』
1985年第1期、科学出版社、北京、pp. 48
-60
徐州博物館・南京大学歴史学系考古專業編著
2003『徐州北洞山西漢楚王墓』文物出版社、
北京、p. 224
嚴耕望 1961『中国地方行政制度史』甲編、
中央研究院歴史語言研究所、台北、p. 440
中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理

処編著 1980『満城漢墓発掘報告』文物出
版社、北京、p. 451

【英文】

Trousdale, W. 1975 *The Long Sword and
Scabbard Slide in Asia*: Smithsonian
Institute Press, City of Washington, p. 332

図表出典

図1・2 坂川撮影

図3 徐州博物館・南京大学歴史学系考古専
業編著 2003より引用・作成

図4 1: 青島市文物保護考古研究所・黄島
区博物館 2019、2: 吉林省文物考古研究
所編著 1987、3: 四川省文物考古研究院・
雅安市博物館・滎經県博物館編著 2017よ
りそれぞれ引用

図5 陝西省考古研究所・始皇陵秦俑坑考古
発掘隊編著 1988より引用

表1 株式会社パレオ・ラボ作成